

## 外国と日本の比較文化論

### —図書館を中心にして 序論—

花 房 良 三

#### はじめに

評論家である加藤周一氏は1993年2月6日の朝日新聞（夕刊）で「(カナダ、ドイツ、スイス、英、米、日本などの大学で教えている。)『各国の学校制度が違うので比較するのは難しいけど、日本はかなりデコボコを含みながら、ヨーロッパのように突拍子もなくできる学生は少なく、アメリカのように高い水準でそろっているということも少ない。それにしても、日本の学生はまったく質問しないんだよねえ』」と述べている。簡にして鋭い指摘である。特に最後のくだりは興味深い。

もうひとつ、ある視点から日中の文化問題の比較を指摘したものがあるので紹介しておきたい。

本学に設置されている研究所のひとつである当言語文化研究所の、日本語研修過程の特別研修生であった劉淑蘭氏（中国）は、研修期間修了にあたり、1991年10月22日に「日中の文化的生活の比較」と題して発表会でその研究成果を披露した。

そのなかで、「中国では近年、日本語に対する関心が高まると共に、日本文化、特に目に見える部分の文化に興味を持っている人が年々増えている。中国の私の学生たちから、『…日本人は物質の面においても、精神的な面においても本当に豊かになってきたのか』などと質問を受け」ていたので、その点を中心に上記標題で講演した。そして氏は「私は物質的には

日本の方が確かに豊かになっていることを認めるが、文化の面ではそうは思わない」と喝破した。

かなり断定的な表現の、その結論には、フロアからもその根拠等を含めて質問が出たのも無理のないことであった。

さて、以上ふたつの国際比較—その尺度が何であれ—を挙げたのは理由のないことではない。小論の展開へのアプローチとして、広義の“文化”の国際比較の事例として、前者は真新しい“話題”であり、後者は多くの人の眼にふれる機会の少ないものとして例示したに過ぎない。

遡れば、暉峻淑子氏による岩波新書『豊かさとは何か』が、日本とドイツの比較をわかりやすく描き出したものとして多くの読者を惹きつけたことは記憶に新しい。この著に文化的領域に関する部分が全体の論旨を支える重要なものとして述べられていたのはいうまでもない。かつてわたしは、そのことについて「…大変よく読まれているという。もっともなことだと思う。世界一豊かになったといわれる一方で、過労死を頂点とする長時間労働、住宅難、福祉行政の貧困などは、〈世界一の豊かさ〉と現実との乖離を実感させて余りあるからである<sup>1)</sup>」と書いた。

ところで、文化とは何か。

字義に拘泥している余裕はない。文化という日本語に喩えられる英語が Culture であり、ラテン語の耕作ないし手入れなどの意より成語されたことは周知のことである。

ひとつのエピソードだけつけ加えることを許してもらいたい。

ナチス・ドイツのもとで原爆につながる核物理学の研究を命ぜられたハイゼンブルグは、米国へ亡命することが可能であったにもかかわらず、そうしなかった。その理由のひとつとして、「人は誰でも特定の言語および思考の空間のなかで生まれ育つ。よほど早くその空間から離れないかぎり、その空間のなかでこそもっとも有効に働くことができる」と述べてい

る<sup>2)</sup>。その当否はともかく、極めて示唆に富む言葉でもある。

「はじめに」が長くなった。小論の目的は比較文化論の一例として、図書館の領域におけるそれを素描することにある。そしてその際、図書館を社会との関わりとのなかでこそ論ずべきだとする立場で述べてみたい。したがって、論述ないし引用する事項が広く社会一般にわたることもさげられないことを予め断っておきたい。

## 1. 社会における図書館—その文化的位置

### 1-1 社会と文化

伊藤松彦氏は、近著『地域生活と生涯学習<sup>3)</sup>』のなかで、「文化をめぐる今日の特徴の最たるものは、社会的諸力の積極的能動的働きかけであろう。…また文化の産業化が進展している。…文化をもつばら政治、経済、社会などと区別できる自律的な領域としてとらえるのではなく、かえってそれらとの生々しい関連のなかでとらえかえされなければならない。このような視点に立つとき、はじめてよく文化の窓から社会全体の問題の所在を照射することが可能になり、併せて文化の潜勢力をつきとめることが可能になるのではないか<sup>4)</sup>」(傍点引用者)と論じている。

文化を社会的文脈のなかで、とらえなおすことにより、社会の問題の照射も可能になるという論述は極めて重要である。とくに、氏が述べているように「産業の文化化を志向する企業メセナが登場し…マスメディアが情報・通信のハイテク化に加速されて市場化を拡大すると共に世論形成力を強化している<sup>5)</sup>」今日では意義深い。

多少、表現は違うが、かつて、暉峻淑子氏は『公共サービスと国民生活』の中で、家庭経済学や生活経済学の立場から「生活の社会化」についてふれ、「生活の社会化現象の中核をなすものが公共サービス<sup>6)</sup>」としているが、この視座は上記の伊藤論文と重要な接点をもっているかに見える。

## 1-2 社会と民主主義

如上のような問題意識をもって今後の日本と世界の社会の進歩・発展のモメントを考えると、その鍵をにぎるのは、〈自立した個人〉、〈自治の気概〉を基盤にした近代民主主義の成熟いかんにかかわるのではないかというの、わたしの考えである。

社会というカテゴリーでこれまで述べてきたが、社会の構成要素の重要なものは〈地域〉である。

東京に先立って老人医療費無料化に先鞭をつけた岩手県沢内村の深沢村長は「本丸は人間教育と生活を豊かにする問題の二つ<sup>7)</sup>」という言葉を残し、宮本憲一氏はいろいろな組織による地域づくりの事例をあげ、「しかしこれらの組織の中心となってきっかけをつくっているのは、常に少数の自立した個人である<sup>8)</sup>」とする（傍点引用者）。

社会と民主主義という重い課題は、社会を形成する文化領域でも同じことである。

エピソード風に簡略に四つの事例を紹介しておきたい。最近死去した女優オードリー・ヘップバーンは、ナチス・ドイツの占領下のオランダでレジスタンスに協力したし、マリリン・モンローは、1956年劇作家アーサー・ミラーとの結婚直前に彼が赤狩りの対象にされ、ハリウッド資本に脅かされたが屈せず、最後までミラーを守り通した。大文豪ゲーテは大著『ファウス』第二部末尾に「生活も自由も、日々これを闘いとる者だけが、それをほんとうに享受する権利があるのだ」と書いた。逆に、名指揮者といわれたカラヤンは、ナチ黨員として頭角を現わしその位置を築いたため、戦後は指揮活動停止を命ぜられたのみならず、市民の厳しい批判にさらされ、その音楽家としての生きざまは、カザルスなどとよく比較される。

### 1-3 社会、文化、民主主義と図書館

1988年の全国図書館大会（日本）の閉会式で、広瀬運営委員長（当時稲城市立図書館長）は、「民主主義の基本にかかわる図書館の職域を守り育てていくことを互いに誓いあいたい<sup>9)</sup>」と大会をしめくくった。

また、ユネスコ公共図書館宣言は「3 公共図書館は、人類が学術と文化の面で達成した成果を理解するために、継続した、生涯を通じての普遍教育が欠かせないとする民主主義の信念を現実的な形で示したものである<sup>10)</sup>」としている。

さらに、アメリカ図書館協会は1980年に「図書館の権利宣言<sup>11)</sup>」を改訂し、日本図書館協会は、1979年改訂の「図書館の自由に関する宣言」の冒頭主文で「図書館は、基本的人権のひとつとして知る自由をもつ国民に、資料と施設を提供することを、もっとも重要な任務とする<sup>12)</sup>」としている（傍点いずれも引用者）。

いずれにせよ、民主主義は、不断の市民の知的学習の上に花開くのであろうし、図書館はそのための中核的存在であろう。従って、図書館は民主主義と共に相互作用的に発展していくであろうというのが、聊か短絡的であるが、わたしの考えである。

## 2. 図書館にみる国際比較

### 2-1 公共図書館の国際比較

紙数も尽きた。結論を急ごう。

図書館の国際比較という場合、何を価値尺度とするか、当然議論されるが、ここでは、①公共図書館の②館外個人貸出冊数（年間、国民1人当たり）とし、③ユネスコの統計を援用することとした。

指数でみる限り、別図<sup>13)</sup>の通りである。

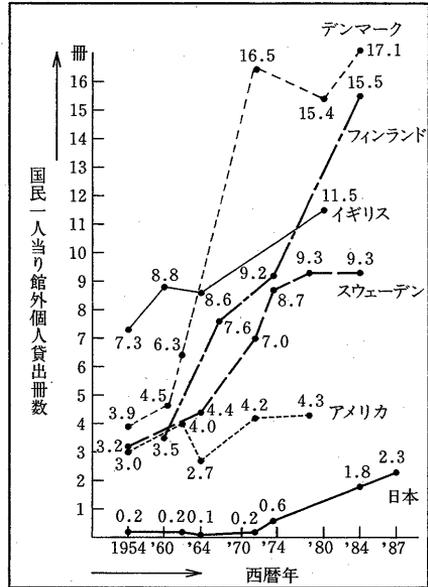
## 2-2 日本における図書館の

### 発展の展望

国民は明らかに図書館の増設、新設を望んでいる。それは、1988年9月実施の総理府世論調査をはじめとするいくつかのデータによって裏打ちされている。

にもかかわらず、別図のような結果を生み出したかは他日を期し論じたい。

最後に日本で特に立ち遅れの目立つ町村における図書館の設置について一言述べ、小論を閉じたい。



前近代からの遺制のもとで、自力で状況を変えようとせず、上からの力に頼ろうとする傾向が未だに根強く存在する。しかし、現在の町村は、社会体制の諸矛盾のもとで、社会資本の投下の甚しい立ち遅れと、都市部との較差に呻吟している。情報化の波にあらわれ、現象的にはファーストフード、カラオケスナック、ビデオショップなどの中心集落への進出は見られるが、それは「表相的都市文化」ともいべき擬似都市化にすぎない。

農村、漁村は生き延びていくには、自らの力で、住民一人ひとりが自立し、自覚し、長いスパンで、真の教育、文化施策が展開されるように奮い立つ以外にない。その時始めて首長等が省りみて自らの町村の活性化に思いをいたすであろう。

注

- 1) 花房良三「図書館と私『豊かさ』と70年の遅れと」『図書館だより』  
No. 34 本学越谷図書館 1990. 7」
- 2) 加藤周一「夕陽妄語」『朝日新聞(夕刊)』 1992. 8. 18
- 3) 伊藤松彦, 川添正人編著 鈿脈社(宮崎) 1992.10
- 4) 前掲書 P59-60
- 5) 前掲書 P60
- 6) 暉峻淑子編著 産業統計研究社 1993. 3 pi
- 7) 伊藤松彦「沢内村 生命と住民自治を守る村」  
『みんなの図書館』 1985. 8
- 8) 宮本憲一『現代の都市と農村 地域経済の再生を求めて』 日本放送  
出版協会 1982 P124-5, 243
- 9) 『全国図書館大会記録 昭和63年度(東京)多摩』 日本図書館協会  
1989. 3. P267  
同趣旨のものとして広瀬氏は「図書館こそが、民主的地域社会を支え  
る自立した市民を育くむ」と述べている(『図書館雑誌』83(1)  
1989.1)。
- 10~12) 『図書館法規基準総覧』 日本図書館協会 1992.11
- 13) 伊藤松彦「離島にこそ図書館を」『しま』No. 139 1989.12.15 P  
18